

アフリカのおいしい水

大島 行雲

喉が渴いた。

理恵子は自動販売機を見つけ、財布から百二十円を取り出すと、何を買おうか考え始める。販売機には何種類ものペットボトルや缶の見本が並んでいた。コーヒー、紅茶、緑茶、烏龍茶、オレンジジュース、スポーツドリンク、等々。何度か行ったり来たりを繰り返した理恵子の視線が、一番端の或る商品の前で止まった。

『アフリカに愛の手を』

ペットボトル入りミネラルウォーターらしき商品の上に、そう書かれたシールが貼ってある。多分、売上げの何パーセントかを発展途上国支援の為に寄付するのだろう。郵便葉書やチャリティーコンサートでもある類のものだ。理恵子は、普段から寄付には快く応じるようにしてきた。貧乏学生なので、金額はたかが知れていたが、寄付しようという気持ちが大事なのだと思う。赤い羽根や歳末助け合い募金は、彼女にとって年中行事みたいなものだ。

ましてや、このミネラルウォーターは定価より高いという事もなく、他と同じ百二十円である。元々の利益の幾らかを寄付

に回そうという発想が嬉しいし、消費者の理恵子に損もない。お金を入れ、そのミネラルウォーターのボタンを押した。

出てきたペットボトルを手にし、その冷たい感触を少し楽しんでから、蓋を開ける。いや、開けようとした。

開かない。

時折、固く締まっているものもあるので、再度、力を込めて捻ってみた。だが、僅かに動く気配すらない。理恵子は特段、力が弱い訳でもないのに。

不良品？

善意で買ったのが、かえって仇になったか。すっかり気分を害して、改めてペットボトルを見てみれば、アルファベットの美しい書体で「ギニアワーム」と書かれている。エビアンやヴィッテルではなく、これまで見た事も聞いた事も無い、美味しそうにも思えない名前だ。駄菓子屋に並べられた怪しげな着色がされた菓子にも似て、ふと不安になる。どうしたものか考え、何気なくラベルに書かれた解説を読む。

『ある統計では水不足に悩む人は世界で四億四千万人いるとされています。アフリカでは、毎日の水汲みのために一日二十キロを歩く女性もいます。』

二十二キロ！ 信じられない……

歩いて五分程度の場所でも自転車に乗ってしまう理恵子には、到底考えられない距離だ。漠然と驚きを感じた彼女だった

が、その後に続く一文に我が目を疑った。

『その苦勞を少しでも知ることができるよう、この商品はお客さまにお買い求めいただいてから、水汲みに必要な時間がたつまでフタが開かないようになっています。』

どうか、アフリカの人々の苦勞を少しでも体感してみてください。』

「ええーッ！」

思わず声を漏らす。とんでもない買い物をした。これでは、今、飲みたくて買ったのに、飲めない。二十二キロを歩くだけの時間と言えば、普通、人の歩く速度は時速四キロ程度な筈だから、約五時間だ。今から五時間経たないと飲めない飲み物なんて、自動販売機で買う意味がない。詐欺だ。

こんなフザケた商品はさっさと捨てて、別のマトモなものを買いなおそうと再び自動販売機に向かう。

視界の隅に、あのシールの文句が見える。

『アフリカに愛の手を』

ふと周囲を見回す。

道路のあちこちに何台もの自動販売機がある。

一台、二台、三台、四台……

毎日の水汲みのために、一日二十二キロを歩く女性がいる。